

## 『色音論』考

寛永二十年刊の『色音論』はあまり華やいだ存在でない。同じく七五文調をもつてする『あづま物語』（寛永一九刊）が江戸市中の巡覧を早々に切り上げて吉原の遊女を品評し、評判記としての名声を専らとすることに較ぶべくもない。それゆえ『色音論』を採りあげた研究の数は多くないのであるが、ここに先行論文に即するかたちで作品としての問題を指摘し、もつて影の薄いこの仮名草子に景気づけを試みたいと思う。

\*

先行研究のうちでは是非採りあげたてみたいのは野田壽雄氏『日本近世小説史 仮名草子編』（昭六一 勉誠社）で

渡 辺 守 邦

ある。本書は仮名草子を時系列に即して（一）慶長・元和・寛永期、（二）正保・慶安・承応期、（三）明暦・万治期、（四）寛文期、（五）延宝期の五つに分け、作品論と題し、分類に従って作品一つひとつを採りあげて論評を加える。

『色音論』は（一）慶長・元和・寛永期の見聞記類に『吉利支丹物語』『そぞろ物語』『薬師通夜物語』などに並んで採りあげられ、奥州しのぶの里の住人が江戸見物を志す見聞記であること、文中に寛永二十年正月京都烏丸の板屋清兵衛の刊行との記述があるものの稀観に属し、現存するのは上巻のみであつて下巻は写本に依らざるをえないこと、文中に祇宜町の芝居、吉原を含め江戸の市中が活写され、さらに作品名のもととなったツバキの栽培とウズラの飼育などをはじめとする当時の流行や風俗にまで描写の及ぶこと

などが述べられる。

さらに野田氏は七五調の文体に関して、

全編韻文体で、なかなか凝った作であるが、古典やら「恨の介」「薄雪物語」「竹斎」の文章の丸取りも多く、

著者はかなり文学趣味に溢れた人であったらしい。

と、著者の教養がもたらす文学的香気を感じ取り、先行する諸作を踏まえた箇所が多くあることを具体的に指摘される。たとえば、

さてもやつらきしづが身の、ゆくゑはなにとなるみかた、しほたれころも袖ぬれて、かはくまもなきありさまを、君より外にたれほさん、まいるわか身とかきとめて（上巻<sup>注1</sup>）

が『恨の介』からの借用、そして、

へんじにかくぞか、れける、

われにこゝろをつくしなる、ありそのうみのはまちとり、ふみたがへにてあるやらん、まこといつはりあるま<sup>（マ）</sup>くは、おちほころもの袖そへて、木かけにつもるはつしもの、うちとけかたり申さんと、くろみませたるみつつききを、見るからこゝろうきうかれ

（上巻<sup>二〇上</sup>）

が『薄雪物語』の利用とされる。『色音論』にあってこの二つの引用は、のちにも触れる《引くになびく》ものの

《ものは尽し》のうちにあつて、神仏に参詣した男が女を見そめて送った手紙とその返書という関係にある。

右の二例のうち『薄雪物語』からの借用という「へんじにかくぞか、れける、われにこゝろをつくしなる」云々は、園部の衛門が清水寺の境内に美女を見そめて送った恋文への美女からの返書のうちの、

女の返し、

御ふみを、見申候へば、われに、こゝろを、つくしなる、ありそのうみの、はまちとり、ふみたがへにてもや候はん（『薄雪物語』上<sup>注2</sup>）

という箇所<sup>注1</sup>に相当するものである。衛門から美女薄雪に贈られたあまたの恋文のうちの第一信に対する返書、すなわち衛門へ宛てた薄雪からの返事である。

もう一つの例である「さてもやつらき」云々と始まる一文であるが、これに似た描写を『恨の介』に探し出すことはできなかった。ただし引用文のもう少し前までさかのぼって、

あるいはふみのことのはに、ちかのうらわにあらねとも、見るめはかりのこひゆへに、うき身はなに、ならのはの、そのかしわ木のこゝろなく、おもひかけたる八はしの、くもてにものをおもひけり、さてもやつらきしづか身の、ゆくゑはなにとなるみかた、しほたれ

ころも袖ぬれて、かはくまもなきありさまを、君より外にたれほさん、まいるわか身とかきとめて（上巻九下）

という部分までも含めて、類似の文章を『薄雪物語』に見出すことができる。これが当該の文章である。

そのふみの、ことはに、

みしよりも、御おもかけの、たちそひて、心は、うき雲の、身は、中そらに、なるかみの、ねには、き、つ、うき人と、そはぬ、おもひに、あし引の、山河おほく、へた、りて、あゆみも、とをき、みちのくの、ちかのうらはに、あらねとも、みるめはかりの、こひゆへに、しほたれ衣、いと、さへ、かはく、まもなき、有さまを、君よりほかに、いつくにか、ほしえさすべき、人もなし

両者の間に、傍線を施したごとく、「ちかのうらわにあらねとも、見るめはかりのこひゆへに」「しほたれころも」「かはくまもなきありさまを」「君より外に」などという文言の一致が見られる。『薄雪物語』にあつて右の引用文は、衛門から薄雪へ与えた第一信、すなわち先に引用した薄雪からの返事の往信に当るものである。他にも、

うき身はなに、ならのはの、そのかしわ木のこ、ろなく

というフレーズが『薄雪物語』第五信の、

なかき、おもひに、ならのはの、其かしは木の、をよひなき、こひちも、よしなや、と、おもへはという表現に重なる。

つまり「さてもやつらきしづが身の」云々は『恨の介』からの借用ではなく、ほかの箇所にも『恨の介』利用の痕跡を見つけることはむずかしい。

『竹齋』との関連も疑わしいものようである。あえて挙げれば、次の二例がそれに当るであろうか。

かなすぎはしをうちわたり、ゆんでを見れば僧上寺、がくのおもてをながむれば、三えん山とうたれたり、さて本堂の見つけには（上巻四）

たよりに拝み申ければ、三門に三縁山と額を打たれたり。寺号は増上寺と申けり（『竹齋』下巻五、一注<sup>3</sup>）。

げにみちひろきおさまりは、かんやうきうのよそおも、かくやとおもひしられたり（上巻五下）

重ね上げたる楼閣は、雲に連なる有様は、唐土秦の始皇帝、感陽宮にも劣るまじ（『竹齋』下巻五、一注<sup>3</sup>）。

二例とも関連を認めるには説得力に不足があらう。つまり

『竹齋』もまた典拠の候補からは外れる。かくして『恨の介』と『竹齋』との利用が消え、『薄雪物語』が残ることになるが、『薄雪物語』とても関連を認め得るのは先に挙げた箇所のみに限られるようである。

そうすると、『色音論』には先行作品の丸取りのな利用はなかつたと考へるべきなのであろうか。こう結論づけるのもまた早急に過ぎるものようである。むしろ『恨の介』や『竹齋』とは文学的香気を違える種類の作品の利用があつた可能性を、まずは検証してみる必要がある。たとえば次のようなマッチングなど、いかがであらうか。

なをもひかしをなかもれは、まん／＼たりしかいしやうに、月下のなみもしろたへに、とかいのふねのかきりなく、さそふをひてにほをあけて、のぼりくだるや水のおも、なみまをわくるつりのふね、こかれてものやおもふらん（上巻七）

みなみは、かいしやうまん／＼として。げつかのなみも、しろたへの。みつぎをはこぶ。とかいのふね、うきよをわたる。いとわさの、みなど／＼に。かきりなし、のきをならふる、まちの人、たみのかまとも、ゆたかなり、からくにまでも。のこりなく、おさまるみよの、ことなれは（『あつま物語』「うへ

の」三六<sup>注4</sup>）

せぎやうをひけはこつがいの、なびくふせひを見るからに、をの、小まぢのいにしへに、見たまだれのうちぞゆかしきと、ゑいしたまひしことの葉を、おもひやられてあはれなり（上巻六）

見つけのはしに、つきしかば、ひにん、あまたなみあつ、こゑ／＼に、ものをこつ、いにしへ、をの、こまち、見たまだれのうちぞゆかしきと、ゑいしけん、ことのはを、おもひやられて、あはれなり（『あつま物語』「見つけのはし」三七）

こんごんりの御屋かた、五ぢうの天しゆたけたかく、とうりてんにもおよぶかと、数千万里に見えわたる……、いらかをならぶむねかどの、たとへをとるにためしなし、から国までものこりなく、おさまる御代のことなれば、たみのかまどもにぎあひて（上巻四）

くもにあまれる。御しろを。あさ日にか、やき。見わたせば。きんぎん、てつとうにて。やかたをたて。しつほうをちりばめ。ところ／＼の。御やぐら。七ぢうの御てんしゆ。とうりてんにも、およふべし。……のきをならふる、まちの人、たみのかまとも、ゆたかなり、からくにまでも。のこりなく、おさまるみよの、ことなれは、あめつちくれを、うごかず。

たみのとさしも、さゝさりき『あつま物語』「うへ  
の」三六上

されはゆふぢよのいにしへは、ことはのゐんの御とき  
に、しまのせんさいわかのみひ、かれら二人かまひい  
だし、はじめすいかんたてゑぼし、しろさやまきをさ  
いたれば、おとこまひとそ申けり、中ごろよりはしな  
をかへ、すいかんばかりもちひつゝ、しらびやうしと  
も名づけたり、さてその、ちはたはれめや、人のこ、  
ろもうかれめの、ゆうぢよゆうくん今はまた、けいせ  
ひなど、かうしつゝ、人のこ、ろをかたふくる、もん  
じにみやこかたふくと、かきたるほどのことなれば、  
かたふきぬるもことはりや（下巻二六下）

むかし、ごとばのゐんの、きように。しまのせんざ  
い。わかのみへ。かれら二人が、まひいだしけると  
かや。はしめは、すいかんに。たてゑぼし。しろさ  
やまきを、さいてまいければ、おとこまいとぞ。申  
ける、なかころより。すいかんはかり、もちいたり、  
それより、しらひやうしとは申なり。その、ち、い  
つれの御ときにや。たはれめ。うかれめ、ゆうぢよ  
ゆうくん。けいせいなど。申けるとは、うけたま  
はりて候（『あつま物語』三六上）

『あつま物語』との関連である。

『あつま物語』は元吉原の遊女評判記であるが、片田舎  
に住まいするあづま男が江戸見物を思い立ち、伝馬町、祇  
宜町と市中をたどり歩くうちに吉原に行き着き、ところの  
者から遊女の評判を聞くという体裁を採る。江戸市中に足  
を踏み入れてあちらこちらとさまよう部分が七五調で語ら  
れ、短いながらも名所記風なのである。『あつま物語』の  
初板は伝存しないが、刊記に次のようであったという。

寛永十九年／六月吉日 はんや／清兵衛開板

そして『色音論』は下巻の板本が現存せず刊記を明かに  
することができないのであるが、後にも触れる『開くも  
の』揃えの中に、『色音論』は京都二条烏丸秋野野町の  
「はんや清兵衛」が刊行するものであると記し、下巻巻末  
に「ことは、くはんゑい二十ねん、はつはるなれば、すゑ  
ひさに、めてたかるへき君かよを」とある。つまり『色音  
論』と『あつま物語』とは同じ版元からの一年違いの出版  
であった。『あつま物語』との丸取りの一致は偶然では  
あるまい。

そして、次のマッチングはいかがであるうか。

ひかしを見ればこびき町、ひくになびくかやさしやな、  
さればひかれてなびくもの、<sup>①</sup>くるまはうしにひかれ  
つゝ、千里をなひくならひなり <sup>②</sup>かた田のうらにひく

あみは、よせくるなみになひくなり、太刀おりかみに金銀を、だいに積みあげひくときは、よくになびけるならひなり、ふゆはさむさに風ひけば、小そてにたれもなひくなり、せぎやうをひけはこつがいの、なびくふせひを見るからに、をの、小まちのいにしへに、見したまだれのうちぞゆかしきと、ゑいしたまひしことの葉を、おもひやられてあはれなり、あたごまいりにそでひけは、なびかぬ人もなかりけり、さればなびけるしなく、あるひは君をみほのうら、たえぬおもひのかなしやと、そてひきなびくこともあり(巻上九上)

一、小歌にのせては、三味線を引く。平家に合て。琵琶を引。歌を誦じては琴を引。

桐の木の琴に成るべきためしにはす、きの山を引さわたるかな

① 都の牛は、車を引く。投頭巾にて、お茶を引。膳を出しては、再進をひく。引菜にひく塩引や、酒も過れば、引出物、広蓋にのせて、小袖を引。客より庭には、馬を引。愛宕参りに、袖を引。神の前には、注連を引。③ 仏の前には、施行を引。数珠引く。木地引く。轆轤引。木を引く。石引く。舟を引く。目を引。弓引く。腰を引く。首引。網引。鳴子引。釣す

る海士は。糸を引く。堅田の浦には、網を引く。

心ひくかひこそなけれあふ事は堅田の浦の網のうけ縄

……春は子日に松を引く。夏は軒葺く、あやめを引。

秋は牛引く星合の空。冬は寒さに、風を引(尤之注) 双紙』下「引く物のしなじな」)

江戸市中に入って以降の『色音論』の行文は「江戸町づくし」の語をもつて評される。景観を織り交ぜながら町名を縁語と掛詞で結ぶところからである。ただし、この種の道行崩れの「町づくし」のほかに、右の例のような純粹の《ものは尽し》の存在をも指摘することができる。「こびき町」の町名から導き出した《ひく》の語を機縁として《引かれてなびく》ものの羅列へと逸れ、すでに触れた『あづま物語』からの「をの、小まちの、いにしへに 見したまだれの……」という引用を包み込んで《ものは尽し》はさらに、

たがひに見えつ見やわれつ、ひよくれんりのかたらひも、ひかれてなひくならひなり、されはわか身もひかばやと、つじのちやうりの袖をひき

と続いたのち、ようやく次へと場面を展開するのであるが、傍線を引いた箇所と言の重なりからして、この《引かれてなびくもの》揃えを『尤之双紙』(寛永九刊)に触発さ

れての営みと考えることは許されよう。

ただし『尤之双紙』が《引く》ものの品々であり『色音論』が《引かれてなびく》ものの品々である違いを見過すのは適切でない。《引かれ》て《なびく》という二つを兼ね備える品々の品揃えには意外と難渋したもののようであつて口舌も滞る。その結果は、単純に《引く》を繰り返すことによつて生じる『尤之双紙』のリズミカルな爽やかさに較ぶべくもないのであるが、それにもかかわらず『色音論』の作者は愚直なまでにおのれを通すことにこだわる。

《引かれてなびくもの》揃えに類する純粹の《ものは尽し》として、ほかに《開くもの》揃えや《廻るもの》揃えなどがあり、《廻るもの》揃えは『尤之双紙』下巻の「めぐるものしなじな」とテーマを同じくする。しかし両者の間に片言隻句の重なりすら見出すことはできない。《引かれてなびくもの》揃えに見た辞句の重なりからして参照は自明のこととすべきなのにもかかわらず、である。ここに『色音論』の作者の別の意味でのこだわりを見る思いがする。

もう一つ残つた《開くもの》揃えであるが、『尤之双紙』にこの見出しは採りあげるところではなく、当然のこととして字句の重なりあひもない。しかし機知とリズムという点に関しては、三例のうちでもっとも『尤之双紙』的

とすることができるようである。

やう／＼ゆけばますますがたの、門をひらくを見るからに、ひらくるものをたづぬれは……、又はつ春のくらひらき、たからをいれしながもちの、ふたをひらくもうれしやな、しづか田ひらきゆめひらき、出家のろんはつめひらき、目を見ひらいてひらくらん、ひらきかねてはてらひらく、むさしの江戸のくはんをんは、三十三ねんすぎてのち、御戸をひらかせ給ひけり（下巻三〇）のごとくである。三つの《ものは尽し》に変化を与え、三様に描き分けようとする意図があつたものかもしれない。

\*

《ものは尽し》へと逸れてしまつた話題を元にもどす。

『色音論』の典拠として『竹斎』と『恨の介』とが想定範囲から外れ、『薄雪物語』も利用は一箇所止まるものであつた。その代わりに『あつま物語』と『尤之双紙』とが新たに浮かび上がったが、利用はいずれも散発的なものであつたことも明らかになつた。

しかし典拠の詮索はこのまま終わるものではない。実は『色音論』には別に意外な書物の利用があつた。その名は『ぢんてき問答』、利用は無慮九箇所及ぶ。九例すべてを

指摘してみることにしよう。

〔例一〕

されはあみたのいにしへは、とうじやうこくのてい  
わうを、はんぞくわうと申せしが、ぜんたう大しと申  
ける、わうじ一人おはします、さいじやうこくのし、  
わうの、をとめたいしにあひなれて、御子二人もちた  
まふ、一千ねんをへてのちに、をとめたいしの御にう  
めつ、これをしゆつりのたねとして、しやうがくふか  
くとりたまひ、あみたとけんじ六十の、御くはんをお  
こしたまひつ、十二くはんをはあひなれて、あとな  
くならせ給ひける、をとめたいしにゆつらる、やく  
しによらいのむかしなり、御子しやくまのたいしわう、  
くはんせおんともなりたまふ、つぎにちくばのたいし  
わう、せいしほさつとなりたまふ、のこりし四十八く  
はんを、みだほんくはんのちかひとして、ほんぶをす  
くふ御ちかひ、いのちのなかきほとけにて、むりやう  
じゆ仏と名付たり（上巻五五）

老僧こたへていはく、あみだによらいは、むかし、  
とうじやうこくのていわう、はんぞくわうと申に、  
ぜんじやうたいしと申わうじ、二十一さいの御時、  
さいじやうこくの御師、しゆくし、わうと申に、を  
とめたいしと申御ひめありしが、び人申におよはず

候。かのぜんしやうたいし、こひにならせ給ひて、  
十まんりのかいしやうをわたるとて、王宮をしのび  
いで給ひて、いろ／＼のくるしみにて、三年三月に  
てうみをわたり、さいじやうこくへ行給ひ、をとめ  
たいしとさいあひあり候へば、さいじやうこくのた  
いじんたち、しかるべからずとて、ふうふともに、  
くもがしまへながしけり。このしまは、とうじやう  
こくへも五百里、さいじやうこくへも五百里なり。  
じんりんはなれくにとをし。とやせんかくやせんと、  
かなしみ給ふはかぎりなし。かくて三十年をすぎ給  
ふに、御子二人まうけ給ふ。太良は、しやくまにた  
いしと申、次郎は、ちくばたいしと申けり。あはれ  
わかくに、かへるならば、一さいしゆじやうのぞ  
みをかなへんとぞおほせける。かくて三十年の後、  
四かい一とうにしんどうして、もろ／＼のりうわう  
たち、くもがしまにいきたつて、四人の人々をい  
だきとつて、ほどなくさいじやうこくのみやこに、  
すて申でぞかへりける。しかるあひだ、はんぞくわ  
うに、ぜんじやうたいしを、わうくうへくわんぎよ  
ならせ給へば、二人の御まごを御覧じて、きゑつの  
まゆをひらき給ふ。かくて一千年の後に、をとめた  
いし御にうめつありしかば、ぜんしやうたいしかな



う。

〔例二〕

されはかくらのはじまりは、地じん五代のことかとよ、天照太神日月を、うばひ給ひていかにせん、あまのいは戸にひきこもり、こくどじやうやのやみとなる、ものうかりけるおりふしに、大りきわうといひし人、かぐらをたくみまはせしに、神ものふじゆまし／＼て、いはとをひらき給ふとき、大りきうちにさし入て、日月さうにいたきとり、こくうにあげり給ひける、日たきそんのみやうじんと、これをあがめてきいの国、山東にいはひたてまつる、みこはさんしんゑんまんの、すがたをまなぶふるす、は、むみやうのねふりをさますなり、五人のかくらおのこをは、五ぢのによらいをへうしたり、さて八人のやをとめは、八大系のとくをかたとる、なをもとびやうしさつ／＼の、こゑはてんちをわがうにし、神をたやかになるふせひ、されはもの見のにはにたち、おもしろさよといふことは、このときよりもはじまれり、めさすもしらぬとこやみに、いは戸をひらきたまふとき、人のおもてのしろ／＼と、見えにしことをそのまゝに、おもしろくともつたへたり（上巻七）

しみ給ひて、是をしゆつりのたねとして、しやうがくをとり給ひて候。かくてあみだぶつとげんじ給ひて、六十の大きくわんをたて、このうち十二ぐはんをば、にうめつありしをとめたいしに、ゆづり給ふ。さるほどに、をとめたいしは、やくしによらいとあらはれ給ふ。太良のしやくまにたいしは、くわんをんとなり給ふ。次郎のちくばたいしは、せいしほさつとあらはれ給ひ候。のこる四十八ぐはんを、みだてうせのひくはんとこうし給ひて候なり。また、いのちなかきほとけなれば、むりやうじゆぶつとも申候なり（『ちんてき問答』45「阿弥陀仏のこと」<sup>注6</sup>）。

〔例一〕は「増上寺」の場面、関東浄土宗総本山増上寺のご本尊の前に「さればあみだのいにしへは……」と語られるその内容は、とうじやう国のぜんしやう太子がおとめ太子と夫婦の語らいをなして二人の王子をもうけ、ぜんしやう太子は阿弥陀、をとめ太子は薬師、二王子は観音、勢至と現ずるとする阿弥陀仏の本生譚である。阿弥陀仏から浄土宗へという連想の糸によって増上寺へとつなげる。『色音論』と『ちんてき問答』との間に長短精粗の差が見られるが、その違いは『色音論』が本生譚の眼目ともいべき俗世における艱難辛苦の数々を端折って冒頭と結末とを短絡したことに起因すると容易に見て取ることができよ

老僧こたへていはく、それかぐらは、ぢじん五だいのはじめ、てんしやうだいじん、日月をうばひとり、あまのいはとへひきこもり給ひての時、こくどくらやみになりけるあひだ、大りきわうといひし人、はうべんをめぐらして、かぐらといふことをたくみて、いはとのまへにてまはせられければ、天しやうだいじん、あらおもしろやとの給ひて、すこしいはとをあけ給ひしかば、又大りきわう、やがていはとにうち入て、日月さうにつかんでいてにける。大りきわうは、その時より、日たきそのみやうじんといは、れて、きいのくにの山東といふざいしよに、あらはれ給ふ。さる程に、みこのまひけるは、三じんゑんまんのすがたなり。ふるすゞのひ、きは、ぢやう夜のねふりをさますなり。五人のかくらおのこは、五ぢのよらいなり。八人のやをとめは、八大ゑのとくをかたどるなり。うつ太こつゝみの音は、しやうじのゆめをさますぎなり。とひやうしのさつ／＼のこゑは、てんちわがうにして、神をだやかなるていなり。かぐらは、このときよりぞはじまり候

〔『ちんてき問答』40「神樂のはじめ」〕。

〔例二〕は天照大神の岩戸隠れに因む神樂の起原、『ちんてき問答』からのほぼそのままの引用と評して大過なかる

う。増上寺にほど近い芝神明宮の境内に神子の舞い姿を見ての所感とするところから、弥陀の本地譚同様これも場所柄に相応した記事とすべきか。

〔例三〕

それ天ちくのことかとよ、ぎば大じんといひし人、八まん四千のくすりをは、のこらずおほえはんべるに、でし一もんのものともに、六まん二千つたへつ、二まん二千をゆるさざり、し、てその、ちのこしをく、二まん二千のねんりきの、ぎばかだびしよにはへにけり、かんねつ二つと、のへて、五ざう六ふをたしかにし、やまひおこたりちゑまさり、たちまちいとくあるにより、三ふくまではすぐるなり、また一ふくはふそくとて、二ふくにこれをさためつ、、いまの世までもつたはりて、こいちやうすちやとなつたり、されはちやとよむもんじこそ、だびのだのじをくだきつ、、一じをさつてちやとよめば、草にあらず木にもなく、ちやのゆのだうく十二いろ、これもやくしの十二神、かゝるいはれのものなれば、こゝろしつかにやすらゐて、二ふくのおちやをきこしめせ、たひのつかれもやみなん（上巻二五）

老僧答いはく、てんちくのぎば大臣は、八万四千の

くすりをおぼえ、でし一もんに六万二千のくすりを  
つたへ、二万二千のくすりをおしへずして死たり。  
そのかなしひのねんりきのくすりとなり、ぎばかだ  
び所に生たり。それにより、かんねつをと、のへ、  
五ざう六ふをと、のへ、ちゑかしこく、やまひなく、  
おほくのむもどくなり。それちやは木にもあらず、  
くさにあらず。又ちやと云字は、だびのたの字をく  
だきて、一もんじをのけて、茶とよむなり。ちやの  
ゆのだうぐは、十二いろなり。これもやくしの十二  
神をへうすなり〔ぢんてき問答〕17「茶のはじ  
め」。

茶の由来であるが、これも『ぢんてき問答』をやや冗舌  
に敷き写したものの。茶は天竺の名医耆婆の墓に生じた霊木  
であるとすることの起原譚は、路傍の一服一銭の茶見世に憩  
い、亭主から語って聞かされるのであるが、その場所は明  
記されず、新橋の橋の上、あるいは新橋を渡って北上し、  
弓町（中央区銀座一、二丁目）へと歩みを進めた途中のど  
こかとしか分らない（挿絵上巻第五図に描かれる一服一銭  
は「くたりさるや」の幔幕を背に茶を立てているが場所を  
特定するような描写はない。出光美術館蔵の江戸図屏風に  
も一服一銭の茶売りが描かれているが、この場合は風炉そ  
の他の茶道具を天秤で担った行商姿をしている。声を掛け

られた場所で開店したものか。なお橋の上で店開きする例  
として、同屏風に、日本橋の橋の上に莫塵を敷いて絵解き  
をする勸進聖がある）。

#### 〔例四〕

ゆみのむかしをたつぬるに、それ天ちくのことかと  
よ、てつりんわうの御とぎに、こうはんべうをと申  
つ、二人のしんかありけるか、大あく人ときこへた  
り、みかとけきりんよからずし、たいぢあらんとせん  
ぎある、おりふしきみの庭前に、ふしぎの木こそゆじ  
ゆつする、長は七しやく五すんにし、えだもなければ  
葉も見えず、みかどゑいらんましゝて、かの木のも  
とにたちよりて、御手をか、け給ふとき、この木には  
かにぬけいて、あとさきゆかみ庭前に、よこたはり  
てそ見えにける、きたいなりけるためしには、やまば  
と一つまひさがり、つたのほそつるくはへきて、かの  
木にかけてとびされば、かぶらや一手あまくだる、こ  
れをとらあげ悪人の、しんかをたいぢあるとかや、又  
しんだんはくはうていの、御代にはじまるわかつてうは、  
異国たいぢの御とぎに、じんくうくはうくうくはの弓、  
よもぎのやにてせめふせて、それ天なかく地ひさしく、  
あめつちくれをうこかさす、国をだやかになりければ、

このときよりもはじまりて、こゝろのまゝに世をわたる（上巻三）

老僧こたへていはく、てんぢくのでつりんわうの時、こうはんべうをとて、二人の臣下ありしか、大あくの臣下なればたいぢあるべしとて、たくみ給ふとき、にはかに御門の御にはに、ゆじゆつしたる木一本あり。たけは七尺五寸にして、えたもなし。じんべんぶつりきなれば、七しゆのつるをあらはして、じんづうのかふら矢にていてとりたるなり。さるほとに、矢はたけきたまらず候。弓は七尺五寸のものなり。しんだんには、くわうていの御とき、ひろまり候なり。又日本には、仁王十五代の御かと、じんぐうくわうぐういこくたいぢの御とき、くわの弓よもぎの矢にて、ふぜんの国うさのみやに御とうりうありて、せめふせ給ひてよりこのかた、ひろまりて候なり（『ちんてき問答』12「弓のはじめ」）。

天竺の鉄輪王が悪臣退治を決意したとき、にわかには湧出したという弓の由来が京橋南詰の弓町の名称に因み説明されている。より詳しくいえば、天竺にて鉄輪王、震旦にて黄帝、日本に神功皇后と三国それぞれについて始原が語られるのであるが、そのうちの天竺の起原譚に限って『色音論』と『ちんてき問答』の間に精粗の差が見られ、『色音

論』の方が長文になっている。これは「ふしぎの木こそゆじゆつする」「この木、にはかにぬけて、」などと類似した表現が重なるところから『色音論』の饒舌とすべきであろう。

#### 〔例五〕

はしのむかしをたつぬれば、しんだん国と天ちくの、さかひにありしりうさ川、ながさ八千余里とかや、この川きしのよこたへに、三世のしよぶつあつまりて、いしのはしをぞかけらるゝ、さて本朝のうぢ川に、これをまなひてかけにけり、はじまりなりしうぢはしに、まさりて見ゆる日本ばし（上巻四）

老僧こたへていはく、作人なく候。たとへば、しんだんこくをこえ、てんぢくへわたりさふらふくちに、りうさがはとて、ながさ八千里あり。この川のよこに、三世のしよぶつあつまり給ひて、いしのはしをかけられたり。則いしのはしとかきて、しやくけうとよむなり。又せいしだうとも申。わがてうにては、いせのうちはしか、さいしよにてさふらふ。いづれもはしは、せいしだうと申候（『ちんてき問答』25「橋のはじめ」）。

天竺と震旦との国境を流れる流沙川に三世の諸仏が集

まあって架けたという石橋に始まるとする橋の由来譚が日本橋の橋の上で説かれるのであるが、弓町における弓の由来譚と並んで、所を得た引用とすることができよう。石橋は能の「石橋」により中国台州の靈地清涼山に至る橋として広く世に知られる。長さ三丈余ながら千丈の谷に架り、仏力の助けなくしては渡りかねるといふ橋である。しかしここにいうように、天竺と震旦との間の流沙川に架けた橋とする別伝もあり、たとえば幸若の「笛の巻」に、

唐天竺の境なる流沙河に着き給ふ。彼河の広き事は、三百二十余町なり。波半天にさかのぼり、沙を洗ひ流せり。流沙の河と書ては、沙流るゝ河と読む。葱嶺山の麓に、一の橋渡る。石橋と是を云。石橋と書ては、石の橋と読む。<sup>注7</sup>

とあり、『慶長見聞集』巻五「日本橋市をなす事」にも、  
夫、橋のはじまりは支那よりしんたん国へ行間に、りうさ川とて長八千里流るゝ、大河あり。三世の諸仏あつまりて此川に石橋をかけ玉ひぬ。しやつきやうといふは是なり。扱又、日本にては伊勢の宇治ばしがかけはじめなり。〔日本庶民生活史料集成』第八卷四三〕とする。『慶長見聞集』は『ちんてき問答』の利用であるう。

以上が上巻であつて、『例六』以下は下巻になる。

#### 〔例六〕

かねのいはれはいかなれば、むししやくそんれうぜんに、いらせ給ひしおりふしに、三おくしゆじやうことくく、とうざんさせんあいつには、かねにすぎたることなしと、お、せいださせ給ひしに、しゆだつちやうじやがたくみつゝ、かねをいさせてまいらす、されはこのかねつくよりも、みかど大じん百くはんゐらうにやくなんによことくく、とうざんせぬはなかりけり（下巻「七」）。

老僧こたへていはく、しやかほとけ、りやうぜんにいり給ひし時、しゆだつちやうしやかゐて参らせたるなり。これをりやうぜん四はうにつりてつきしかば、三おくのしゆじやう、ことくく参り、そのほかだいじんも御かども、十万人ないし五万人、一人、おもひくく人に人をつれてぞ、とう山せられける（『ちんてき問答』46「時の鐘のはじめ」）。

〔例六〕は分かりにくい。仏前の鐘は釈尊説法の開始を知らせるため須達長者が鑄て奉つたことに始まるとする梵鐘の由来なのであるが、なぜか興行街の祢宜町で「土佐が能」に因んで話題に上る。「土佐が能」は耳慣れない呼称であるが、「人形を以て能を舞せ、其間に浄瑠璃をかた」った芸能という（『近世奇跡考』巻三「牛若木偶の衣

裳)。能の詞章を淨瑠璃で語り、舞台上では人形を操つたものか。月光の下、迷い子を尋ね求めて母親が童宮ゆかりの鐘を撞く「三井寺」の印象的な場面を契機に「かねのいはれはいかなれば、むししやくそれうぜんに」と釈尊靈鷲山説法の座へと話題を転じて梵鐘の起原に結びつけるのであるが、いささか飛躍が過ぎるとせねばならないのではあるまいか。

〔例七〕

かみのまへなるとり井には、いかなるいはれあるときく、しんぼちこたへさればこそ、こゝろあらんずともからは、とり井につきてあばうんの、もんをとなへて参りには、うちをとをればけかうには、外をとをるがならひなり、しやうじはたれもはなれねば、ゆき、うちをとをりては、し、てうまる、まなひにて、りんゑをきらふこゝろなり、されは世けんを御らんぜよ、らつくはえたにかへらずや、はきやうふた、びてらさぎや、ながるゝみづとふるあめと、人のさかりのいにしへは、ふたゝひかへることもなし、又たまがきと申せしは、くはかいをへうす世の中の、ぜんごんあらんともがらは、じひのこゝろをあつくして、ぶつくはにいたるこれは又、方十かいをへうすぞと、かたり給ひ

し（下巻三下）

老僧答いはく、鳥井二ばしらは、生死をはなる、ことかたきゆへ、参りには、鳥井の内をとをる。下向にはそとをとをる。上下におなしかたをとをらぬものなり。とをればし、て又生るゝ心なり。りんゑをきらふ心なり。又玉かきとて、くわかいをへうす。ぜんごんの人はざいほうめつして、ぶつくわにいたるなり。ほう十界をへうす（『ちんてき問答』10「鳥居のはじめ」）。

〔例八〕

すまふこそ、れうぶ大日ぶんしんの、れうぶのふ二のそのすがた、ぢきに見せたるまなびにて、かみおもしろくおぼする（下巻三上）

老僧こたへていはく、すまふは、りやうぶの大日ぶんしんにて、りやうぶ不二のすがたをみせたる物なり。かみおもしろくおぼしめされ候間、それにより用候（『ちんてき問答』38「相撲のはじめ」）。

〔例九〕

にんわう四十五代をは、しやうむ天わうねんがうは、せうれき三ねんきさらぎの、はじめつかたの事かとよ、

田むらの御内かさかげと、申せし人のありけるが、にはかにおもふことありて、しゆつけにならせたまひしが、そのおもかけをしのはせて、かさをたくみてめされける（下巻三下）

らうさうこたへていはく、かさは、にんわう四十五  
たいのみかど、しやうむてんわうの御時、しやうれ  
き三年に、田むらの御うちかさしげといふ人の、た  
くみたり。それにより、ほねかずさだまらず、たけ  
よこもさだまらず候。又さしかさは、にんわう七だ  
いのみかど、かうれいてんわうの御時、はじまりて  
候なり（『ちんてき問答』49「傘のはじめ」）。

〔例七〕から〔例九〕までは湯島天神の場に集中する。天神の鳥居前で托鉢する小坊主にことばをかけ問答を交わすという設定になっている。「かみのまへなるとり井は、いかなるいはれある」という質問に対しての小坊主の答えが〔例七〕鳥居の由来、「かみのまへなるすまふには、いかなるいはれある」への答えが〔例八〕相撲の由来である。そして参詣人からの喜捨を笠で受けた小坊主への質問「いかにしんぼち、はながらをかさにうけとめ給ふ事、いかなること」への答えが〔例九〕笠の由来である。鳥居と神前の相撲とがこの場の話題として違和感はないものの、笠は聖武天皇の「しやうれき」三年二月上旬、田村の御内かさ

しげが考案したものとする由来譚までもが天神の神域において話題に採りあげられる必要が、はたしてあったのであろうか。〔例六〕の杵宜町における鐘の由来の説明ともども不審の残るところである。

違和感についてさらにいえば、先に問題なしとした日本橋における橋の濫觴についても、しっくりとしない何かが残る。日本橋の場面は次のように描かれる。

なをゆくすへはよろつ町、今そはしめてみちのくの、  
はてまてかくれなかりける、日本はしにもつきにけり、  
はしのむかしをたつぬるに……〔例五〕……、はじ

まりなりしうちはしに、まさりて見ゆる日本ばし、  
そらをはるかなかむれは、方百町にてつせきの、  
つみぢやくらは十重廿重、ふもとのほりのまん／＼と  
……

これが『色音論』の日本橋に関する記事の全文である。いま、説明のために、あえて段落を設けてみた。第二段落の「はしのむかしをたつぬるに……まさりて見ゆる日本ばし」はすでに〔例五〕として紹介したごとく『ちんてき問答』からの引用である。そして第三段落の「そらをはるかなかむれは」以下は日本橋の橋の上からの眺望であり、「てつせきのつみぢやくら」「ふもとのほり」と江戸城の偉容をうたいあげ、さらに文章は諸大名の屋形を描くことへ

と移り、再び日本橋にもどることはない。

つまり日本橋そのものについては、

今そはしめてみちのくの、はてまてかくれなかりける、  
日本はし

が案内のすべてであつて、たとえば先にも少し触れること  
のあつた『慶長見聞集』巻五―「日本橋市をなす事」に  
ある、

件の日本橋は慶長八癸卯の年、江戸町割の時分、新規  
に出来たり。その後此橋御再興は元和四年戊午の年な  
り。大川なれ(ば)とて川中へ両方より石垣をつき出  
しかけ給ふ。敷板のうへ三拾七間四尺五寸、広さ四間  
式尺五寸なり。此橋に於ては昼夜二六時中諸人群をな  
し、くびすをついで往還たゆることなし。

という地誌的に詳細かつ具体的な記述に較ぶべくもない。

これはひとり日本橋に限ることではなく、他の例につい  
ても同様のことがいえる。(例二)の芝神明も、

やう／＼ゆけばしんめいの、とり井ぬがきをうちす  
ぎて、本しやになれはみこのまい、かぐらをそうした  
まひけり

されはかぐらのはしまりは……  
例二……人のお  
もてのしる／＼と、見えにしことをそのまゝに、おも  
しろくともつたへたり

かくらもすぎてしんめいに、ふかくきせいをかけま  
くも、うだ川はしにさしか、り……

が全文であり、この場合も、天照太神の岩戸隠れを物語る  
第二段落の神楽の起原が異様な長文を誇る結果に終わって  
いる。(例二)から(例九)に至るすべてに底通するのは、  
地誌的名所記的な記述と長文の由来譚との間のアンバラン  
スである。このアンバランスの因つてきたる理由が、そも  
鳥居とは何ぞや、茶とは何ぞやを事物の根元にまで溯つて  
問い明らめようとする『ぢんてき問答』という書物を重視  
することに於ける点は論を俟たないであろうが、同時に地誌  
的名所記的な記述を極端なまでに節略している点をも見落  
としてはならない。これは事物起原譚と地誌の調和という  
問題設定に無理のあつたことを示唆し、つまりは『色音  
論』を地誌と考えること自体に検討の余地のあることを意  
味する。

和田萬吉氏『古版地誌解題』(昭和八 大岡山書店)以  
来江戸の地誌の劈頭を飾るものとされてきた『色音論』の  
再検討は別に稿をおこして論じることにして、いまはとり  
あえず、『色音論』に『ぢんてき問答』からの引用があつ  
たこと、その数がバランスを欠くまでに目立つことを指摘  
するに止めておくことにしたい。



注1

『色音論』は朝倉治彦氏『仮名草子集成』第三十四卷の本文を、句読点を一部私に改めつつ用いた。末尾の括弧内は底本のページノンブル及び上下段の別である。

2 『薄雪物語』は『仮名草子集成』第六卷所収の本文を用いた。

3 『竹斎』は日本古典文学大系九〇『仮名草子集』（前田金五郎氏校注）の本文を用いた。

4 『あつま物語』は『仮名草子集成』第一卷所収の本文を用い、そのページノンブルを添えた。

5 『尤之双紙』は新日本古典文学大系七四『仮名草子集』の本文を用い、そのページノンブルを添えた。

6 『ぢんてき問答』は寛永九年板を底本とする拙稿「版本・ぢんてき問答―翻刻と解題―」（『国文学研究資料館紀要』九 一九八三・三）の本文を用いた。

7 幸若「笛の巻」は新日本古典文学大系五九『舞の本』の本文を用いた。

（わたなべ もりくに・実践女子大学名誉教授）